HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	景気循環に対する諸見解 ： 20世紀初頭の欧米各国における経験的研究から
Author(s)	小林, 大州介
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 10, 43-47
Issue Date	2021-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80986
Type	departmental bulletin paper
File Information	070REBN_10_043.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域経済経営ネットワーク研究センター年報　第 10 号
北海道大学　2021. 3

＜第 3 回研究会報告書＞

景気循環に対する諸見解[1)]
―20 世紀初頭の欧米各国における経験的研究から―

小林　大州介

1. はじめに

20 世紀初めから研究され始めた「景気循環論」という研究領域は，その対象の性質ゆえに，きわめて経験的な方法が使われた。景気循環という現象に対して 18 世紀から 20 世紀初頭にかけての経済学者らは，物価や生産高などの経験的データを収集し，時系列の変動を観察することによって，そこに何らかの規則性を見出そうとした。資本主義市場として統合された各地域の経験的データを突き合わせて見てみると，非常に似通った波形を示す場合もあり，一見すると一般化可能な原理が背後に存在するようにも思える。

他方で欧米各国のデータ間には大きな相違が存在しており，またそれぞれの景気循環と呼ばれる波の原因や経過も多様である。経験的研究からの一般化はそれぞれが特定のデータを照合して仮説としての理論を参照した結果であり，全てのデータに整合的な理論が存在するわけでは無い。景気問題のこうした一般性の欠如から，スミスやミル，マーシャルと言った古典派経済学者らは不況や恐慌現象を偶発的なものと見なし，理論研究が扱う対象から除外していたのである（妹尾 2016）。また，仮にデータが理論の説明するような挙動を見せていたとしても，実際にそれが理論の示す原理に従って発現したと確証する事も出来ない（Hayek 1932）。

しかし，景気循環の研究者らは恐慌のような大きなショックを予測するために，経済学者は様々な仮説を用意した。例えば I. フィッシャーや R.G. ホートレーらは景気循環の要因を純粋に貨幣要因にもとめ，F. ハイエクや L. ミーゼスは銀行による貨幣発行を原因とした。A. シュピートホフや G. カッセルらは投資機会を重視し，A. アフタリオンや C.F. ビッカーダイクは消費財の変動を，S. シスモンディや J.A. ホブソン，W.T. フォスターらは消費の過小を，そして F. ラヴィングストンや F.W. タウシッグ等は心理的な要因を強調する（Hayek 1932，妹尾 2016）。

また，マルクスが資本論において示した「恐慌＝資本主義終末の兆候」という図式に対し，その検証作業として，設備投資や在庫，各種工業品の生産高と言った各種経験的データが「理論」の精度の検証のために使われだしたという背景もある。つまり，マルクスの理論的考察から導き出された予言と現実の経済データとの照合を行う事が，この領域の一つの目的でもあった。では「景気循環」という現象研究における経験的データと理論との関係とはどのようなものなのであろうか？

1）本報告は，マルクス主義の恐慌論 / 景気循環論をサーヴェイしていた報告者が，加藤真琴氏の経済学史学会関東部会報告「W.C. ミッチェルと『シュモラーのプログラム』―ミッチェルのプログラムの探究」（2020 年 12 月報告）の報告論文に刺激を受けて計画したものである。氏にはシュンペーターとミッチェル，そしてドイツ歴史学派の関係について様々な示唆を受けたことを特記したい。本報告が氏のシュンペーターとミッチェル研究の更なる進展の足掛かりになることを願うものである。

本報告では，上記の問題意識に基づいた「理論とデータ」の関係を解明する研究の第一歩として，米国の研究者 W. ミッチェルと，オーストリアの J.A. シュンペーターの研究を比較し，それぞれの研究者が持つ「ビジョン」や「方法論」が景気循環に関する各国のデータの取り扱いにどのような影響を与えたのか，それぞれの景気循環論の持つ意義を含めて議論した。

2. 景気循環研究の例：ウェズレイ・ミッチェル

W. ミッチェルは米国の経済学者である。1902 年にカリフォルニア大学教授となり，1913 年にはコロンビア大学へ移籍，そして 1920 年には全米経済研究所（NBER: National Bureau of Economic research）を組織し，1945 年まで同研究所の会長職を務めた。さらに 1929 年の大恐慌の折には，フーバー大統領の下で組織された社会情勢調査会の議長を 1933 年まで務める。主著としては『景気循環とその原因』（1913），『景気循環 I. 問題と其の設定』（1927），『景気循環 II. 景気循環の設定』（1947），『景気循環 III. 景気循環の過程』（1951）等がある。彼は景気循環分析において，米・英・独における，財貨生産，建設事業，運輸，通信，卸売り及び小売りにおける物価，商業及び製造業の売上高，製造から流通までの各段階における在庫，外国貿易，労働時間，賃金及び雇用，個人所得，企業利益または損失，新規事業形成，貯蓄と投資等の多岐に渡る大量のデータを扱っている。

彼は統計データの収集・整理による「波動の検出」を作業の中心に据えており，この研究スタイルはしばしばクープマンスなどから「理論なき計測」として揶揄された。しかし彼は当時定説とされていたジュグラーによる 12 年周期の経済循環が実際に存在するかどうかの検証も含めてデータを扱っており，どのデータを使用するかについての基準として，ジュグラーの理論を参照していることは明らかである（妹尾 2016）。

一方でミッチェルはあくまでも景気循環現象の観察に重点を置き，国家の「経済的命運」を推し量ろうと考えた。彼は新古典派の示す，正常な経済状態としての「均衡」を「観察されていない」として退け，それぞれの景気循環のサイクルや動きの方向，山頂や谷の底辺のタイミング，拡張と収縮期間，そしてそれぞれが以下に相互に関連しているかを調べた（妹尾 2016）。彼は各国の景気循環に対し同一の原因を求めず，各国の事情を考慮した説明を行う。例えば，1907 年に発生した恐慌について，米国のものは心理的な「パニック」が景気の悪化に拍車をかけたことを指摘し，これはイギリスやフランス，ドイツには見られない現象であったことを指摘する。他方で同年の恐慌が英国に与えた影響については，これを「典型的な恐慌」であったと説明する。当時ロンドンは金の世界的マーケットの中心地であり，他国の問題は直接ロンドンにも影響を与えた。1907 年恐慌は，上半期にはエジプトや南アフリカを襲い，10 月にはオランダ，ニューヨークへと飛び火した。結果としてロンドン株式市場におけるアメリカ鉄道株は下落したが，こうした価格の攪乱による影響を蒙っただけであり，英国ではパニックは生じなかったのである（Mitchell 1913）。

このように，各国の景気循環における強弱の要因をそれぞれの状況を基に推し量ろうというのがミッチェルの立場であった。よって彼の景気循環論では，各国のそれぞれの時期に対応した景気循環はそれぞれ独自の期間と強さを持ち，大きな「差」が存在する事が示された。彼によると「景気循環の継続期間は，主として互いに独立した多数の要因の合力によるものと見なされる」のであり，「一定の継続期間の循環を生み出す傾向のある何らかの主要な影響は，無限に多彩な仕方で結合された他の要因によって，大いに変容を受ける」（Mitchell 1926）という。ミッチェルは各国のそれぞれの循環デー

タを忠実に解釈することを目的としており，努めて，そこに多様な要因を認めようとしていた。

3. 景気循環研究の例：ヨゼフ・アロイス・シュンペーター

データと理論の関係性について，ミッチェルと好対照をなすのがシュンペーターの景気循環論である。シュンペーターは 1909 年にチェルノヴィッツ大学の准教授となり，1912 年にはグラーツ大学の教授に，そして 1919 年には，1 年に満たない期間であったがカール・レンナー内閣の蔵相を務め，1925 年からはボン大学の教授，1932 年以降はハーバード大学の教授を務めている。彼の主著としては『経済発展の理論』（1912），『景気循環論』（1939），『資本主義・社会主義・民主主義』（1942），そして『経済分析の歴史』（1954）等がある。

シュンペーターが景気循環の問題を意識し出したのは，おそらくウィーン大学で彼の師であったベーム＝バベルクによる 1905 年のゼミナールであった。そこで彼は，R. ヒルファーディングをはじめとするオーストロ・マルクスの面々と知り合い，ベームやオーストリア学派を受け継いだ L.v. ミーゼスらとともに論戦を張った。このゼミナールに参加した学生の殆どが後に景気循環理論の構築に関わっていることから察するに，このゼミにおいてマルクスの恐慌論を含めた「景気」に関する議論が繰り広げられていたであろうことは想像に難くない。

彼はマルクス主義者による恐慌の説明に対抗するため，理論的な景気循環メカニズムを考えなければならなかった。そこで執筆されたのが 1912 年の『経済発展の理論』である。同書でシュンペーターは「静態」と「動態」を基礎とする循環過程を理論化し，その中心に「企業者」という特別な主体を置いたことは周知のとおりである。企業者という特別な主体が存在する場合，経済はどのような振る舞いをするのか，という問題を信用創造や企業者利潤等を基にしながら抽象的・理論的に論じ，そこから景気循環という現象を引き出すのが彼のねらいであった。つまり彼の景気循環の説明は，景気循環という現象自体を吟味する以前に，「理論」的な構成を持つ体系として，既に出来上がっていたのである。

シュンペーターは『経済発展の理論』を書き終えた後，景気循環を「理論」と「歴史」，そして「統計」という分析を統合した著書を執筆するという目標を持った。しかし 1914 年に第 1 次世界大戦が生じ，そして終戦の後 1919 年にカール・レンナー内閣入閣して以後，スキャンダルによる政治家としての敗北や銀行家としての失敗，そして妻子を亡くす等の様々な不幸の中で，この目標はなかなか達成されなかった。そして 1920 年代の後半に至って，漸く執筆は開始された。

1939 年に出版された彼の『景気循環論』は，『経済発展の理論』を理論的ベースとして，統計的説明・歴史的説明を加えたものである。彼のハーバードの同僚であったアボット・アッシャーはこの書が「時間と空間を無視している理論と，個別的素材の関連の欠如してる歴史をそれぞれ補い合わせる」ことを目的としていることを主張し，また経済史家の E.S, アンデルセンはこの書の「統計は日付の確定作業」であり，「モデルの均衡近傍を歴史的時間の中に特定」する試みであり，これにより連続的変化を追う事を可能にしたことを述べた（武田 2010, P. Asher 1951，E.S. Andersen 2006）。例えば，まずは長期の「経済発展」を代表するものとして，長期波動として知られるコンドラチェフ派の期間をおよそ 55 年と定め，そのサイクルの開始・終了年をそれぞれ決定する。つまり，第 1 循環は 1787－1842，第 2 循環は 1843－1897，第 3 循環は 1898－1913（第 1 次世界大戦の勃発により，途中で中断），第 4 循環は 1919－1929 まで，というように，具体的な時期を決定してしまう。さらにコンドラチェフ循環は 6

つのジュグラー循環に細分される。例えば第2コンドラチェフ（1843－1897）には，①1843－1851，②1852－1860，③1861－1869，④1870－1879，⑤1880－1888，⑥1889－1897という，8年を1サイクルとする6つの循環を当てはめるのである。こうした「日付」に各国の歴史的説明を加えてゆくというのが彼の手法である。

第2コンドラチェフの例を見てみよう。コンドラチェフ派の中の各循環には役割があり，第2・第3ジュグラー循環では，技術的な基礎的革新が拡散し，第4・第5循環ではそれが社会に定着し，ライフスタイルの変化を引き起こすとされる。例えばドイツの第2コンドラチェフ循環において，石炭鉱業の産出高は1840年には500万トンであったのだが，そこから毎年50％ずつの急激な増加を示し，1896年には8569万トンにまで累積した。この増加の背景には鉄道需要の増加があったとされる。次に，アメリカにおけるコンドラチェフ第2循環を見てみると，灯火用の石油は第2コンドラチェフが開始された時期に徐々に増加してゆき，その中の第3ジュグラー循環からはロックフェラーが製油所を建設し，徐々に拡散した時期に当たる。つまり，イノベーションによる影響が徐々に深化してゆく課程がコンドラチェフ派の各時期にきっちりと対応しているのである（武田2010，J.A. Schumpeter 1939）。

しかし，シュンペーターの説明にも各国の状況を考慮した説明も見られる。これは「技術受容」のタイミングのずれとして説明される。例えば，ベルリンにおいて1879年には既に電気網や電気供給所における技術的問題が解決されており，「電車」を実用することが早くから可能であったのに対し，アメリカにおける電車は1887年になってリッチモンドで漸く運転が開始された。技術的な差のために電車導入はドイツの方が1ジュグラー分早かったのである。ここで，技術の構造的な「連鎖」や，創造的破壊による旧産業からの優秀な人材の移行などが要因として挙げられるが，どれも彼の『経済発展の理論』をベースとし，それを整理したものとなっている（武田2010，J.A. Schumpeter 1939）。

シュンペーターの『景気循環論』の手法とは，つまり既に完成された「理論（発展理論）」に照らし合わせて実際のデータを読み解くという物である。彼は同書の中で，各国の景気循環の同一性を強調し，データから各日付を割り出していることを強調するが，基本的な循環の流れは同一であり，技術革新や設備投資と言った側面からの一面的な解釈が目立つ。『景気循環論』におけるシュンペーターの手法については，S. クズネッツもその書評で批判している（Kuznets 1940）。

結論

これまで議論してきたとおり，ミッチェルは各国のそれぞれの循環にそれぞれの要因を認めることにやぶさかでは無かったが，シュンペーターは自身の「発展理論」をあくまでもデータを読み解く際の基準として用い，それに準じた形で景気循環を論じている。ミッチェルの分析に対しては，クープマンスが「理論なき測定」と揶揄したとされるが，データを読み解くための「理論的説明」のストックについてはバラエティに富み，それぞれの国柄や時代を反映したきめ細やかな分析が可能となった。他方で，シュンペーターの景気循環論は理論的先入観が強く，観察の理論負荷性が強く表れている。つまり，融通の利かない説明も多くなされている。

シュンペーターの手法を擁護するならば，理論というのは観察されるデータを理解可能な体系的知識へと変換するための道具と考えたとき，データを見る際の一つの基準として役立つという事である。これにはミッチェルも同意したであろう。さらに一歩進んで，シュンペーターの手法はミッチェルのような経験主義的傾向の強い研究者には見出すことのできない，現

象の背後に存在する何らかの要因を「仮説」として議論しうる可能性である。これは，既存の理論を基にする観察者の目には映らない，重要な経済的変化を示す可能性を持つ者と考えられる。そしてその一例が「経済発展」という事になるのではないか。

参考文献

妹尾芳彦（2016）『景気変動論』新評論。

武田壮司（2010）「シュンペーターにおける発展プロセスの不確定性」季刊経済理論 第46巻第4号。

Hayek, F.（1933）*Monetary Theory and the Trade Cycle*. Jonathan Cape. 古賀勝次郎，谷口洋志，佐野晋一，嶋中雄二，川俣雅弘訳『価格理論と景気循環 価格と生産―ハイエク全集Ⅰ-1』春秋社 1988。

Kuznet, S.（1940）“Schumpeter’s Business Cycles”. *The American Economic Review*, 30, 257-271.

Mitchell, W.C.（1926）Preface for *Business Annals*, National Bureau of Economic Research.

――――――（1941）*Business Cycles*, University of California Press. 種瀬茂，松石勝彦，平井規之訳『景気循環』新評論 1971。

Schumpeter, J.A.（1939）*Business Cycles*. Mc Graw-Hill. 吉田昇三訳『景気循環論』有斐閣 1958。